車内のポスターに見つけた言葉

たしかあれは，羽田空港に向かう途中，山手線の電車の中だったと思う。私は車両の中ほどに立っていたのだが，そこから離れた壁に１枚のポスターが貼られていた。

ポスターの中の写真は，林の中に佇む三角の建物。その横に，数行の文字が並んでいる。目を凝らして見ると，少し大きな文字で書かれてある最初の２行が読めた。

伝え合うより，
受け取り合うこと。

そう書いてある。

何のポスターなのか，この時はまだわからなかったが，なるほど，と思った。

授業もそうかもしれない。

自分の意見を伝えようとすること，伝え合いながら学びを進めていくことは確かに大事である。しかし，他者の考えをよく聞くことも大切にされなければならない。

ただ聞くだけではなく，言っている内容をきちんと解釈する必要もある。なぜ，そう考えたのかということについても思いを寄せ，「うん，わかるよ」「その目の付け所はいいね」のように気づけるとよい。

さらに，それで終わらせることなく，その意見に対して自分はどう考えるのか，どういう立場をとるのか，自分は次に何をしようと思うのか，関連する考えや方法はないだろうかのように，考えを先に進めたり，視点を広げたりできるとよい。

「受け取り合う」という言葉に，これらのことが全て詰まっているように感じた。

そして，それは「伝え合う」ことよりも意識しなければならないことかもしれない。そんなことを思った。

車内は，通路に立っている客も多かったため，そのポスターに近づいて小さな文字まで読むことができなかった。が，下の方に「高原教会」と書いてあることはわかった。

その後，すぐに乗り換え駅に到着したため，それ以上はわからないまま，空港に向かうモノレールに乗り換えた。

先ほどのポスターが気になり，スマホを取り出して，「高原教会」と検索してみると，「軽井沢高原教会」がヒットした。サイトを開いてみると，「メッセージ」の中にポスターの言葉が書かれてあった。

この言葉は，結婚してこれから新たな生活を始めようとしている新郎新婦に向けたものなのだろう。でも，授業づくりでも大切にしたいと思った。

「メッセージ」には，他の言葉もあった。最初に目に飛び込んできたのは，次の言葉。

辿り着くまでを
楽しめたなら。

人と人がお互いのよさを認めながら，新しいものを創り上げていくときに大切にすべきことは共通しているのかもしれない。

〔参考〕軽井沢高原教会　公式サイト
https://www.karuizawachurch.org/

149号編集担当　夏坂哲志

提　起　文

自立した学び手の育成につながる評価

夏坂哲志

1 授業のねらいと評価

授業研究会で，時々，評価のことが話題になる。「指導案に評価のことが書かれていないために，授業が混乱してしまうのではないか」のような指摘である。確かに，方針が定まらず，授業が迷走してしまうことがあり，その原因が評価の仕方にある場合もある。その点は反省しなければならない。

しかし，評価を軽んじているわけではなく，むしろ授業の中における一瞬，一瞬の子どもの反応をつぶさに観察し，その時の子ども達の状況を的確にとらえ，授業のねらいに向かうための指示や発問を選択しているつもりである。

子どもの反応が，授業前に予想したものである場合には，評価も予定通りに行うことができるかもしれない。ところが，子どもの反応をこれまでの経験をもとに，何通りも予想するのだが，それに当てはまらない考えや疑問などが出てくると，それをどのように受け止めればよいのか，困惑してしまうこともある。

子どもは，教師が提示した問題を見て，教師が発した言葉を聞いて，考えたことや感じたことを素直に表現しているだけである。それを，あらかじめこちらが用意した規準に照らし合わせようとしても，それは必ずしも正しい評価には結びつくとは言えない。

そう考えると，指導案の展開の中に，「ここで，これを，このように評価する」とあらかじめ記したとしても，その通りにできるとは限らない。子どもの反応を何通りか予想するのと同様に，評価についてもそのタイミングや方法を一つに限定せずに，柔軟に対応することが求められる。

その結果，授業でねらう方向に進むことができるとよい。

2 多様な視点をもつ

子どもには，個々にその子の特性があり，それに合わせた評価も必要になる。

よく発言するが，自分の考えをよく吟味せずに，思いつくとすぐに手を挙げる子もいれば，発言は多くはないが，他の子の意見に耳を傾けて，じっくりと自分の考えをつくりあげていく子もいる。表面的には，前者の方がよく考えているように見えるが，実際は後者の方が深く考えているということになる。

このような子どもの姿を適切に評価していくための方法についても考えていかなければならない。

「授業の中に，評価問題を取り入れるべき

だ」といった意見もあるが，それによって子どもの思考する時間が浅いものになるとすれば，それは本末転倒ということになる。一様に，毎時間取り入れることには無理があるだろうし，何のための評価問題なのかという問い直しが必要になる。

また，本校では，「まなびポケット」というクラウドプラットフォームを利用しているが，子どもが自分専用のPCなどをもつようになると，ノートや紙の小テストだけではなく，また，授業時間だけでなく，様々な方法で子どもの学びの状況を把握できるようになってきている。

そうなると，評価の仕方も子どもの特性に応じたものに変えていかなければならないだろう。

3 学習指導要領における評価の観点

今回の学習指導要領では，評価の観点が，育成を目指す資質・能力の3つの柱に沿って，「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つに再整理された。これにより，指導と評価を一体化させやすくなると期待されている。

その方法としては，評価規準を作成し，行動観察（発言・表情・つぶやき・手の動き……）やノート分析（考えの変化，誤答，試行錯誤の跡，他の子の考えに対する自分の意見，授業後の感想……）によって評価することが示されているが，毎日の授業の中で，多種多様な考え方や理解度を瞬時に細かく分析することは容易なことではない。

特に，評価の観点の一つである「主体的に学習に取り組む態度」では

① 知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面

② ①の粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整しようとする側面

という二つの側面を評価することが求められるが，「粘り強く取り組めているかどうか」はどうやったら見取ることができるのか，粘り強く取り組めていない子がいたときに教師は何をすべきなのか，のように，実際の指導に活きる評価のあり方について，現場の先生方は頭を悩ませている。

そういった悩みを解決するヒントを，本号において得られることを期待している。

4 自立した学び手を育てるための評価

今年度，筑波大学附属小学校算数部では，算数の授業を通して「自立した学び手」を育てることを大きなテーマとして掲げ，公開講座や本誌の誌面でもそのための授業のつくり方について提案を続けてきた。

これはあくまでも私見だが，「自立」とは自分で（他者の助けも借りながら）世界を切り拓いていくことであり，「自立した学び手」とは，自分に合う学び方を見つけていける人だと考える。

本号でも，「自立した学び手を育てる」という視点から，「評価」について論じていただくことにした。

算数科において
「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するか

「主体的に学習に取り組む態度」の学習評価

國學院大學人間開発学部　田村　学

1 評価規準の明確な設定

具体的な学習活動に応じた評価規準を設定できることが求められている。評価規準を明確な言語で示すことは，学習活動において育成を目指す子供の姿を鮮明にすることでもある。それは，子供の姿を確かに見取り妥当性と信頼性の高い学習評価を実現することにつながる。また，授業における学習活動のイメージが明らかになり目指す授業の実現可能性を高めることにも結び付く。

その意味では，評価規準を授業者が設定できること，しかも，可能な限り具体的な言葉で設定できることが大切になる。例えば，「①おもちゃを改良する方法について，真剣に考えている」と評価規準を設定したとしよう。この評価規準によって，どのような資質・能力が育成されたかを診断し，判断することができるだろうか。「真剣に」の言葉から，目を見開いて，じっくりと，「うーん」とうなりながら改良している姿を評価すればよいのだろうか。それではあまりにも曖昧ではないだろうか。子供がおもちゃを改良する方法について，どのような思考を発揮することを期待しているのかを明確に言語化したい。そのためにも「②友達のおもちゃと比べたり，動きの原因を探ったりしながら，おもちゃを改良する方法をアイディアシートに書き込んでいる」と表記してはどうだろうか。

ここでの①と②はどこが違うのか。一つは，子供の中で行われる認識のための手続き的知識としての思考スキルが明示されているかどうかにある。①は「真剣に考えている」としているのに対して，②は「比べたり」「原因を探ったり」として，情報を処理するための認識の仕方として「比較」「因果」を期待していることが明らかにされている。後者であれば，友達と比べたり，動きの問題点の原因を追究したりする姿が期待されるわけだから，授業における学習活動も，当然，他者との比較場面が用意されるであろうし，動きの問題状況を炙り出し，その原因究明に向かうような授業を設計することとなろう。

もう一つの違いは，②では子供の行為する姿が明示されているが，①はその姿が曖昧になっている。「アイディアシートを書き込んでいる」場面は容易にイメージでき，その活動場面の子供の記述を診断し評価することが行われることとなる。

このように考えていくと，「思考・判断・表現」に関しては，評価規準において，情報を処理する手続き的知識としての思考スキルを明示できるかどうかが大きな鍵を握ること

が分かる。

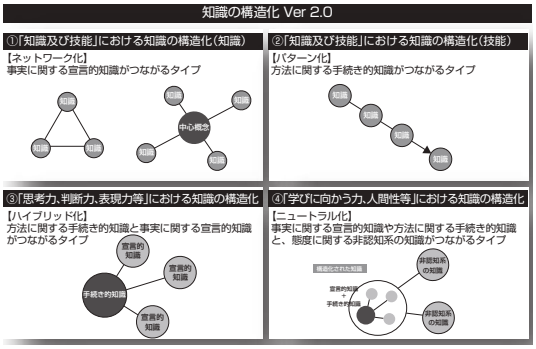
一方で，「主体的に学習に取り組む態度」においては，どうだろうか。例えば，「①野菜の栽培に熱心に取り組んでいる」と評価規準が示されたとしても，我々はどのように診断し判断すればよいのだろうか。やはり曖昧ではないか。そこで，「②クラスの友達と力を合わせながら，野菜の世話を続けている」と評価規準を言語化してはどうか。ここにも，先ほどと同様の二つの違いが生じていることは容易に理解できよう。期待する行動としての好ましい態度は「力を合わせる」ことであり，それは「協働」する姿を目指していることである。好ましい態度を表す言葉，すなわち非認知系の知識が明確に示されることが鍵となる。この非認知系の知識を分かりやすくイメージさせるものとして「性格特性の五因子」を参考にしてはどうかと考えている。

2 「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

「主体的に学習に取り組む態度」の評価に際しては，単に継続的な行動や積極的な発言を行うなど，性格や行動面の傾向を評価するということではなく，各教科等の「主体的に学習に取り組む態度」に係る観点の趣旨に照らして，知識及び技能を習得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりするために，自らの学習状況を把握し，学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら，学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である。

このことを，下図の「知識の構造化 Ver 2.0」に基づいて次のように定義していく。

下図の④に示しているように「主体的に学習に取り組む態度」は，事実的知識と手続き的知識と非認知系の知識が一体となり統合した状態に向かうことであり，この手続き的知識の中核的な存在として，例えば，「性格特性の五因子（誠実性・外向性・協調性・開放性・安定性）」を位置付けていく。その結果，「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準は，誠実で，外向的で，協調的で，開放的で，安定的な子供の姿を期待して言語化されることになる。



「主体的に学習に取り組む態度」として期待する姿は，「粘り強さ」や「学習の調整」が，新たな視点として提言された。それは，知識及び技能を獲得したり，思考力，判断力，表現力等を身に付けたりすることに向けて粘り強く取り組むこと，その粘り強い取組を行う中で，自らの学習を調整する態度が期待されていることを意味する。しかし，期待する態度がどのような姿であるかは，明確に言語化しなければイメージができない。また，期待する態度はこの二つだけでよいのかも気になる。なぜなら，学習指導要領においては，

編集後記
editor's note

◆本誌の特集で「評価」を取り上げるのは，第34号（2004年）以来ではないかと思う。

その号の特集題は「『考える力』の評価はどうあるべきか」。読み返してみたが，当時とは違う視点で読むことができた。

今回は，第34号の特集を企画した山本良和先生にもご執筆いただいた。子どもが学習対象に初めて出合う場でこそ「思考・判断・表現」する姿を見取ることができる。これを意識して授業設計をしていきたい。

◆「主体的に学習に取り組む態度はどう評価すればよいのか」という質問を受けることがある。田村学先生にご提案いただいた「性格特性の五因子」を，いかに具体的な子どもの姿で言語化できるかということが，この評価の鍵になりそうである。

◆今井むつみ先生には，言語心理学の見地から貴重なお話を伺うことができた。人間は時間が経つと忘れてしまう。そのことを認め，関連付けていく学習を楽しく繰り返すことを心がけたい。また，数感覚を豊かにしていくことの重要性を改めて認識した次第である。あっという間の楽しい１時間半であった。

◆本号の編集作業が最終段階に入った頃，訃報が入ってきた。本校 OB の手島勝朗先生ご逝去の知らせである。

読者の皆さんもご存じだと思うが，全国算数授業研究会を立ち上げた初代会長であり，本校の研究企画部長なども歴任された。

これまでのご指導に感謝申し上げるとともに，心よりご冥福をお祈りいたします。合掌。

（夏坂哲志）

次号予告 No.150
next issue

特集　AI 時代を生きる子どもたちに算数授業で育てたい力

AI の発達によって「将来，AI に仕事を奪われるのでは？」と不安の声が上がるなか，現代の子どもたちに算数授業で育てたい力とはどのようなものなのか。そして，これからの算数授業を創っていくときに，「算数授業の何をどう変えていったらいいのか」ということについて考えていきたい。

定期購読
subscription

『算数授業研究』誌は，続けてご購読いただけるとお得になる年間定期購読もご用意しております。

■ **年間購読（６冊）** 5,292円（税込）
［本誌10% 引き！　送料無料！］

■ **都度課金（１冊）** 980円（税込）
［送料無料！］

お申込詳細は，弊社ホームページをご参照ください。定期購読についてのお問い合わせは，弊社営業部まで（頁下部に連絡先記載）。　https://www.toyokan.co.jp/

算数授業研究 No.149
2023年10月31日発行

企画・編集／筑波大学附属小学校算数研究部
発　行　者／錦織圭之介
発　行　所／株式会社 東洋館出版社
〒101-0054　東京都千代田区神田錦町2丁目9番1号
コンフォール安田ビル２階
電話　03-6778-4343（代　表）
03-6778-7278（営業部）
振替　00180-7-96823
URL　https://www.toyokan.co.jp

印刷・製本／藤原印刷株式会社
ISBN 978-4-491-05377-6　Printed in Japan